

母の701 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

子どものそばにある短歌⑥／千葉聡 2
わたしの原風景②／谷本雄治 3
こどもがこどもに紙しばい道場／ミノオカ・リョウスケ 4
「おいしいのぼうけん 子どもの心を描いた 田畑精一展」
を開催して／西本和三 6
新刊紹介／内田麟太郎、高橋和枝 7
イラスト／種村有希子



さわって楽しめる絵本の普及を願って

岩田美津子

見えない私たちも楽しめる絵本が図書館や書店の棚に並んでいて欲しいと願い始めたのは、40年近く前のことです。2歳を過ぎた次男を図書館に連れて行ったとき、お気に入りの絵本を手に取り、そこにいた職員に「この絵本に点字付けて、ぼくお母ちゃんに読んでもらうねんから」といったのです。その言葉がきっかけとなり、絵本に透明なシートを貼った手作りのてんやく絵本だけではなく、さわってたのしめる絵本の出版物があればいいなと願うようになりました。

そんな夢を語り続けていると誰かが耳を傾けてくれるものです。そして、1996年の秋、印刷会社、絵本作家、編集者の協力を得て、点字と絵の形を透明な樹脂インクで盛り上げた、国内初のフルカラーの点字つき絵本『チョコチョコキョッキン』（こぐま社）を世に送り出すことができました。その反響は大きく、こうした絵本をもっと増やしていく必要性を実感し、点字つき絵本の出版経験がある会社呼びかけて2002年4月に初めて情報交換の場を設けました。それが「点字つき絵本の出版と普及を考える会」の始まりです。発足からしばらくはなかなか前に進むことができませんでしたが、数年経った頃から少しずつ点字つきさわる絵本が出版されるようになりました。新しい絵本が出る度に新たな工夫が凝らされ、点字つきさわる絵本の可能性が広がってきています。ページ数の多い『ぐりとぐら』（福音館書店）では「合紙」製本という方法が開発されました。そして、『いないいないばあ』（童心社）では、原本の形を生かすため、通常点字の本ではありえない右開きという形が実現したのです。

こうして参加されている皆さんの情熱と努力に育てられ、9社から30冊近い点字つきさわる絵本が出版され、今年、会は20周年を迎えることができました。この20周年を記念して、9月には教文館ナルニア国と高崎シティギャラリーで記念展が開催されました。会場には点字つきさわる絵本の全点を並べるだけでなく、記念展用に製作された会のPR動画と、会が誕生するまでの経緯を漫画にした「岩田美津子物語」、点字つきさわる絵本についてのQ&Aのパネルも展示し、会のメンバーによるトークショーも行われました。開催期間中には多くの方が足を運んでくださり、じっくり絵本をさわって、見るだけでは味わえなかった楽しさをたくさん発見したようでした。この様子を見て、この展覧会をもっといろんなところで開催できないものかという思いが強くなり、その検討を始めています。今後さらに多くの出版社が、さわって読むことのすばらしさを共有してくださり、誰もが楽しめる絵本が増えることを私は願っています。

(いわた みつこ／NPO法人てんやく絵本ふれあい文庫代表)

子どものそばに ある短歌

6

秋空の下で 千葉聡

飛べさうで飛べぬ空なり子を抱きて地にどつしりと足つけて生く

佐藤モニカ『夏の領域』

子どものころは空を見上げて、想像の世界のなかで、どこまでも高く飛んでいたのに……。

ジョギングに出かけると、ご近所のタカダさんによく会います。小さなミキちゃんを抱いているタカダさんの立ち姿は凜としていて、もう三十代のはずですが、体育会系の学生みたいに見えます。

「ジョギング、頑張つて！」

タカダさんとミキちゃんに手を振りかえし、僕は駆けていきます。

タカダさんは、バレーボールで日本代表に推されるほどのアスリートだったそうです。年月を経て、彼の活躍の場は、コートから家庭へと変わりました。

今、タカダさんは「ミキを抱っこしていると、腕の筋トレになるんです。現役時代より腕が太くなりましたよ」と笑います。だいじな人を守るために鍛えられた腕は、かっこいいです。

飛び方や、飛び場所は少し変わるかもしれませんが、でも、大人になっても、きっと飛べますよ。タカダさんの腕の逞しさが、そう教えてくれます。

ちば さとし 1968年生まれ。歌人・高校教諭。著書に『短歌は最強アイテム』（岩波ジュニア新書）、『グラウンドを駆けるモーツァルト』（角川書店）などがある。

わたしの原風景

32

谷本雄治

たにもとゆうじ／児童文学作家

少年時代を過ごしたのは名古屋市南部、海の埋め立て地にできた新興住宅街だった。庭の土を掘ると貝殻が出てきて、居ながらにして潮干狩り気分が味わえた。

そんな土地柄なので、原っぱはあっても雑木林なんて見たこともない。同年代の東京人にさえ気の毒がられるほど、貧しすぎる自然の中で育ったように思う。孫そっちのけで虫を追いかけるのは、そのウラミ晴らさでおくべきかという無意識のあらわれだろうか。

田んぼはあった。メダカやフナをよく捕ったが、ガラスの水槽は高級金魚用だと思っていたので、とても使えない。それならと、木枠にビニールを張る水槽を考えた。ミカン缶詰の空き缶だとすぐにさびて魚も死ぬが、その心配のないのがうれしかった。

小鳥店で買う一羽二百円の十姉妹をふやせば五十円、七百円のセキセイインコのひなは三百円で引き取ってもらえた。実際にはえさ代にもならないのだが、子どもにもそんなフリーダーもどきの商売が許されていた。店に入りびたり、聞かじりの専門用語を駆使して、いっばしの愛鳥家を気取っていたところがなつかしい。

当時は十円サボテンもあって、何種類か育てた。隣のおじさんに取リ木の仕方を教わってすぐ、五葉松で試して得意になった。ところがそのあとで元株が枯れたため、父親にこっぴどく叱られた。

おちよこの底に穴をあけたミニ鉢では、松の実生苗みしやうなまこを育てた。懸崖けんがいだとか文人仕立てもおぼえたが、たまたま手にした本に、若いうち
に盆栽をすると早死にしますぜと書いてあった。そいつはたまたま
その趣味はすぐに捨てた。そのタタリか、いまだにトマトさえまとも
に育てられない名ばかりの菜園家になっている。

赤レンガの粉と塩を混ぜてナメクジを溶かす薬を発明し、太い釘を叩きつぶしてフナを解剖するメスもこしらえた。自然にも物にも恵まれなかったものの、自分の工夫でなんとかしようという意欲だけは蓄積できた。そのおかげで、退屈の虫は寄りつかない。

イラスト／平澤朋子



「さあ、はじめますは、子どもが演じて、それを子どもが観て楽しむ紙しばいなりー！ われこそは、けいこにはげんで良き演者をめざさんとする子よ、ここにあつまれー！」

二〇二二年春、そんな口上を募集チラシに書いて始めたのは、小田原駅東口図書館での「こどもが こどもに 紙しばい道場」という試みです。

ルールは三つ。

一、紙芝居を演じるのは子ども。

二、観客も子ども。

三、大人は見守るだけ。

つまり、紙芝居を軸にした、子どもによる、子どものための場、です。

まずきっかけは、神戸にある流泉書房さんで出会った「子どもが子どもに読み聞かせ」という店内イベントです。毎週金曜日の夕方、小さな店の奥にある絵本棚の前に子どもたちが集まって、絵本の読み聞かせをしている光景を見て驚きました。店主の大橋さんが横で手伝いはしますが、まさに子どもが絵本を読み聞かせ、それを子どもたちが熱心に聞いているのです。

書店がつけたキャッチフ



ミノオカ・リョウスケ

兵庫県神戸市生まれ。絵本・紙芝居・図工作家。子どものための美術教育やワークショップも行う。絵本に『どんどんキップ』（鈴木出版）『じょうききかんしゃピーコロ』（童心社）、紙芝居に『ここほれガッチャ』『しゅつどう！はしごしゃノビールくん』『よるのせいそうしゃ スーパーくん』（以上童心社）などがある。

レースは「読んでる姿はカッコいい」。そうなんです、読んでる子も、聞いている子も、なんだかカッコいいのです。しかも、みんななんとも良い表情。これはいい！何が起こっているのでしょうか。

自分が読んでいる時は、観客の反応が気になります。だから観客になった時にどう反応すれば良いか、わかるようになるし、熱心に観る。観客が熱心だと、自信が出ます。読む側も、観る側も、達成感を味わっているんでしょう。自然と良い表情に。子ども同士で、そんな好循環が無理なく生まれていました。大事なのは、大人の介入は最小限であること。「子ども同士の真剣な遊び」であることです。

こんなおもしろいこと、真似しないわけにはいきませんよね。しかもこれ、紙芝居に向いているはず、と直感しました。絵本は一人でも楽しめますが、紙芝居は観客あってこそ成り立つ双方向性が特徴。「こどもがこどもに紙しばい」の企画、試す価値あり、でしょう。

場には紙芝居作品が豊富にあることが不可欠なので、書店よりも図書館の方が良いと考えました。そんな時、運よく出会ったのが開館してまだ二年の小田原駅東口図書館。ちょうど新たな試みを探しているところだったので、この「紙しばい道場」を提案しました。

企画の話をすると、多くの人は「子どもが演じるのは、可愛いですよね」と言います。それはあくまで大人目線での話。重要なのは、観客も子どもであることで、大人のためではないのです。大人に見せる「上手さ」を会得するのが目的ではなく、子どもたちが感じ合う楽しさを育む場にしたい。そんな説明をして、「ではとにかくやってみますか」となりました。

図書館の児童書担当者たちと企画を相談していると「なんとなく関心のある子どもたちを集めるのも良いが、それ以前に、紙芝居を演じることが出来る子どもを育てる必要があるのではないか？」との提案。なるほど確かに、その通り。いきなり場を作っても、演じてくれる子がいないと、どうにもなりませんからね。そうして、少人数での紙芝居教室という形からはじめることになりました。

一カ月間一回、計三回の稽古と発表会で四力月。定員は五名。ちゃんと楽しんでほしいので、少々芝居がかった設定にもしてみました。なにせ、小田原ですからね。目指すは、「こども紙しばい者」。ここは、そのための修行をする道場。入門者来れ！です。

そんな形で紙しばい道場「春の部」は始まりました。

一回目は、同じ紙芝居作品をそれぞれ



が演じ、紙芝居を演じる時の基本を簡潔に伝えます。とにかく習うより慣れるスタイルで、あつという間の一時間。

そんな様子を、小さな子どもたちが珍しそうに見てくれています。図書館のスタッフが、観客役として呼び込んでくれたのです。練習なのですが、観客がいると、やっぱり意欲が出ますからね。大人は気配を消して見守ります。

雰囲気さえ確立できれば、後はとにかく

く紙芝居経験を重ねるだけ。こちらは適時アドバイスをするのみ、です。

しかし、月に一回、一時間の稽古は、あつという間。正直、すぐ上達するわけではありませんが、変化はあります。たぶんそれは、子どもなりの欲が生まれているからでしょう。

参加者の一人、小学一年生の女子は、とても恥ずかしがり屋。姿は紙芝居舞台の陰に隠れてしまい、小さな声しか出せず、まるでささやくように脚本を読むのが精一杯。でも一生懸命なのは痛いほど伝わってきます。

そこで、二回目の時に「思い切って大きな声を出してみよう」とアドバイスを単純化。まず型から入る一手です。このアドバイスは、他の子にも有効でした。「読む」から「伝える」への一步を感じてくれたのかもしれない。

三回目の時は「時々、観客を見る」というアドバイスを追加。「伝える」から「演じる」に、また一歩進みました。



そして迎えた発表会。直前のアドバイスは、「自分が思うよりも、ゆっくり間をとって」の三歩目を加えて、「声」「動き」「間」の二歩三歩を確認。

さて本番です。小学一年生の女子は、時々観客を見てニッコリと笑顔を見せながら、大きな声でゆっくり、堂々と演じきりました。あつばれ！ 見事な「紙しばい者」の誕生！ 自信に満ちて、本当にカッコいい。もちろん、他の子も良い表情。紙芝居を軸にした喜びです。予想はしていましたが、やってみたいとわかない、意外な驚きを、子どもたちは与えてくれました。

子どもが、地力を発揮して前に進む姿は、とても清々しい。大人の予想と企みを軽々と超えていきます。先の神戸での会も、大人が絵本の読み聞かせをしていたら、ある小学生が「オレの方がうまい！」と言って始めたのが最初だと聞きました。じつは、大人の方が子どもたちに導かれているんですね。

さて、この「紙しばい道場」も、いったいどこへ連れて行ってくれるんでしょうか。では、真剣勝負で楽しみながら、秋の部もスタート。

「いぎ、はじまりはじまりー！」

「紙芝居」だから楽しい！

小田原駅東口図書館
鶴巻恵理

参加した子どもたちは、講師のミノオカさんのアドバイスを素直にきいて、積極的に練習し、私たちの想像をはるかに超えて成長していきました。発表会では、どの子もしっかり演じていて感動！ そして、観客の子どもたちの楽しそうなこと！ 発表会では、小さい子どもたちも、長い時間しっかりと集中し、観て、聴いていました。

「子どもがこどもに」演じるから、そしてそれが「紙芝居」だから、よいのではないだろうか。紙芝居は、抜き方などのルールがわかれば子どもにも難しくなく、読むのではなく演じるので、ある意味、絵本よりも自由で、子どもに向いているのだと思います。そして観客の子どもも、大人ではなく子どもが演じているから、それが紙芝居だから楽しいのではないかと思います。演じ手、観客、どちらにも「こどもがこどもに紙しばい」の意義が感じられました。そしてなんととっても、私たちもとても楽しかったし、子どもってすごい！ 紙芝居って楽しい！ と感動をたくさんもらいました。

「おいしいれのぼうけん 子どもの心を描いた 田畑精一展」を開催して 西本和三

七月三十日から八月七日まで、「おいしいれのぼうけん 子どもの心を描いた田畑精一展」が、神戸市のギャラリー・島田で開催されました。開催に至る経緯や、会場の様子を、主催者の西本和三さんに伺いました。

「田畑精一展は東京だけよ」二〇二一年六月、東京・池袋で行われた展覧会「ありがと う 絵本作家・田畑精一が歩いた道」の会場で、童心社会長の酒井さんからその一言を伺って、この展覧会が東京だけで終了するのはなんとも惜しい気持ちがかみ上げてきました。

そこで是非関西で開催したいと思いました。田畑さんは大阪府生まれで、兵庫県芦屋市で育ちました。そこからほど近い神戸の「ギャラリー島田」での開催に迷いはありませんでした。

素人が、個展を開催するのです。それも「田畑精一」という、名前を冠した個展を開くのですから、周りは半信半疑だったと思います。しかし、童心社をはじめ作品を貸し出していた他出版社、また東京での開催にあたられた方々のご支援がありました。そして、友人知人がポスター、DMの配布やSNSへの掲載、新聞社への紹介もしてくれました。他にも多くの方々に支えられて展覧会が前に進んでいきました。

そして二〇二二年七月、ようやく開催にこぎつけました。九日間の会期中二百六十名を超える来館者があり、



三世代の家族や親子づれの姿が目につきました。親から子へ、子から孫へ、過去・現在・未来へと作品が引き継がれているように思えました。

六十代ぐらいの女性は、「もう嬉しくて涙がでます。息子はもう成人していますが、幼い時、『おいしいれのぼうけん』を読み聞かせていたのですが、息子より私のほうが虜になってしまいました」と興奮気味に話されました。

女性四人のグループは子どもの昔の保育所仲間で、学芸会で『おいしいれのぼうけん』の劇を脚本から衣装、舞台装置まで作ったことを話してくださいました。

来館された一人ひとりに、『おいしいれのぼうけん』との出会いや再会がありました。そして田畑さんの描いてきたものから、それぞれが何かを受け取り、未来に向けて時間が動き出しました。

(にしもとかずみ／紙芝居文化の会運営委員・人と人を結ぶ紙芝居の会代表

BOOK

名シリーズ絵本登場

内田麟太郎

文句なしに面白い。そしてあったかい。

こまつと、はたの、コンビの成功とっていいだろう。作品は絵本テキスト大賞受賞作『まいごのモリーとわにのかばん』に続く、シリーズ第2作である。断言してもいいが、第3作、4作と、長く続いていくにちがいない。それほど、物語が、主人公が、脇役がしっかりしている。そして、はたが描く登場者たちも、くすくす笑わせてくれる。それは贅沢すぎるほど、あちこちに散りばめられている。子どもたちは、絵本をめくるごとに幸せにしてもらえるだろう。

こまつの発想はやわらかい。前作ではわに革のかばんではなく、わにがかばんで名脇役だったが、今回は^{こうもり}蝙蝠傘ではなく、こうもりの傘が名脇役だ。いや、わにのかばんは「そうは、いかんぜ」と、指定席を譲らず笑わせてくれる。いうまでもなく名脇役のいない映画はつまらない。わにのかばんは『モリー』にはもう欠かせない名脇役である。そうでなければファンが許さないだろう。作者冥利に尽きるというものだ。

お話？ 雨が降ってきたので、モリーがバス停までこうもりの傘を持ち、お父さんを迎えに行きます。つまらないでしょ。絵本だもの。絵本、見てね。

(うちだ りんたろう／絵詞作家)



まいごのモリーと
こうもりのかさ

こまつのぶひさ／文
はたこうしろう／絵
定価1430円
(本体1300円+税10%)

「こどもは、どんぐりひとつです」 高橋和枝



ひみつのえんそく

かわしまえつこ／作
武田美穂／絵
定価1430円
(本体1300円+税10%)

熱がでて寝ていたそうたは、突然現れたたぬきといっしょに遠足へ出かけます。たどり着いた山の遊園地の入り口で「入場料が払えない」と心配するそうたに、案内係のやまがらは「こどもは、どんぐりひとつです」と、にっこり。

こどもは、どんぐりひとつ！ もし私が小さなこどもだったら、この言葉をどれだけ嬉しく思ったことでしょうか。なにげないひとことだけど、こどもはみんな、この世界に歓迎されて生まれてきているのだと、心がしんと明るくなります。

木のつるのブランコ、ほんものの鹿の背中に乗るメリーゴーランド、大蛇のジェットコースター。すこし突飛な遊園地だけど、でも実は、遠い昔からずっと、(目にははっきり見えなくても) こんな場所がどこかにあったような気がしてきます。

そうたたちが帰ったあとも、山の遊園地では、お客さんもないのに大蛇は山に鎮座し、メリーゴーランドの鹿は池の周囲をまわりつづけます。よく考えるとちょっと怖い。でも、そのおかげで、その気になったらいつでも、またここに来て遊ぶことができるのだと、ほんとと安心もするので。

(たかはし かずえ／絵本作家)

BOOK

10月の新刊図書！

おいしいともだち

みかんくんがね…

とよたかずひこ／さく・え

定価935円（本体850円＋税10%）



カチンコチンになって、ひとりぼっちのみかんくん。ぴょーんと箱をとびだしたけれど、自分のいい場所を見つけられなくて……。

どうぶつしかけえほん

のんびり！ どうぶつパーク

いしかわこうじ／作・絵

定価1045円（本体950円＋税10%）



のんびりした癒やし系の動物たちが大集合！ しかけをめくると動物たちが動き出すよ。読み聞かせしやすい鳴き声やオノマトペも盛りだくさん！

絵本・こどものひろば

いのちが かえっていくところ

最上一平／作

伊藤秀男／絵

定価1430円（本体1300円＋税10%）



初めて大イワナをつり、よろこぶ少年。お父さんは、そのイワナを焼いて食べようというが……。命の重さを実感した少年の心情を描く感動作。



イラスト／種村有希子

読者の声

性とかからだの絵本

うみとりくのからだのはなし

遠見才希子／作 佐々木一澄／絵
定価1430円（本体1300円＋税10%）



遠見先生が連載されていたコラムを拝読していたので、きつと今まであった「性教育」とは違った本だと期待して読みました。子ども（九歳）も「男の子と女の子の双子の、それぞれの体のつくりの話かと思った」と言っていました。その知識も必要ですが、「自分の体は自分のもの」で、かけがえない大切なものだといまうまっすぐなメッセージを、これほどわかりやすく伝えてくれる本はなかったと思います。感動しました。うみとりくが最後までプライベートパーツを見せないのが、信念を感じられてとても良かったです。
（埼玉県 M・A 四一歳）

とこにこえほん

びりびり

中新井純子／作・絵

定価1100円（本体1000円＋税10%）



赤ちゃんがこの絵本を読むと真剣な表情になり、そして笑ってくれます。また上の子（三歳）も何の動物が楽しそうに答えています。

（北海道 M・T 三三歳）

あとがき

●教えるとは共に希望を語ること。学ぶとは心に誠実を刻むこと—このレイ・アラゴンの言葉を教えてくれたのは全国学校図書館協議会の笠原良郎先生です。日本中の学校図書館の充実と青少年の読書振興に尽力してこられました。9/6逝去されました。子どもの本全体の導き手がまたいなくなり淋しいですが、我々は子どもに未来への希望を語り続けねばなりません。◎

●「点字つき絵本の出版と普及を考える会」のPR動画を、会の仲間とともに撮影・編集しました。岩田美津子さんの思いや、会の成り立ちについて、そして見えない方たちがどのように絵本をさわって読んでいるのか、映像を通して少しでも伝えたいという思いから作りました。会のHPからご覧いただけますので、ぜひアクセスしてみてください。⑩

2022年10月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第701号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。

